Ｂ－８　辞書活用

「活用力」育成のために、児童それぞれの語彙の豊かさが必要となる。また、児童が知らない情報や知識を獲得したり、文章を書く基礎となる漢字を覚えたりすることも大切である。更に、知識を獲得するためには色々な物事への知的好奇心を高めなければならない。そこで、辞書活用を手だての一つとすることにした。

辞書の中でも、国語辞典の使い方を学ぶのは３年生時であるが、１年生時から使うことにした。１年生を含め低学年では、言葉の意味を調べるというより本として「読む」ということを目的にした。読むことにより国語辞典に親しむだけでなく、知らず知らずの内に言葉の意味を学ぶことになる。そして、３年生より本格的に国語辞典の使い方を学び、言葉の意味を調べていく。また、３年生以上の学年で国語辞典だけではなく漢字への興味を持つようになると漢字辞典の使い方、さらにはより高度な国語辞典の利用へと辞書の活用を広げたいと考えた。

(1)　付箋の利用

一度調べた言葉には、付箋を貼っていく。付箋を貼ることにより、調べたことを忘れたとしてももう一度思い出すことができる、付箋を貼った量で自分の調べた事に対する自己評価を上げられる、また、友だちと付箋の量を競うことで調べることへの関心を高めようとした。

(2)　教科での利用

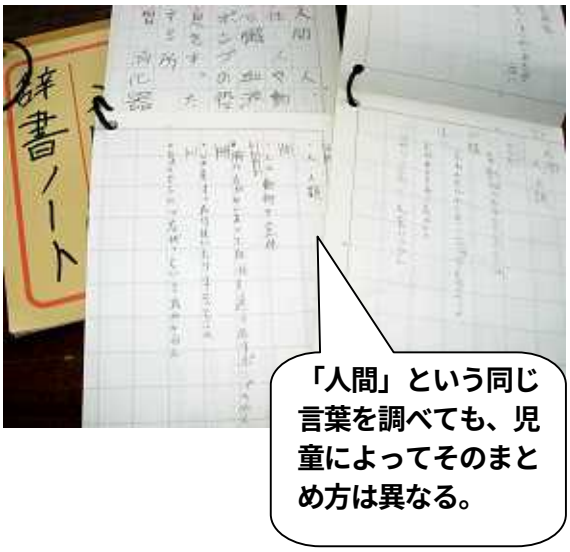
国語辞典を国語の時間だけで使うのではなく、算数や理科、社会などいろいろな教科で使うことにより、文章の読み取りの手助けとした。児童が使いやすくするために、理科室や音楽室など特別教室にも国語辞典を常備した。

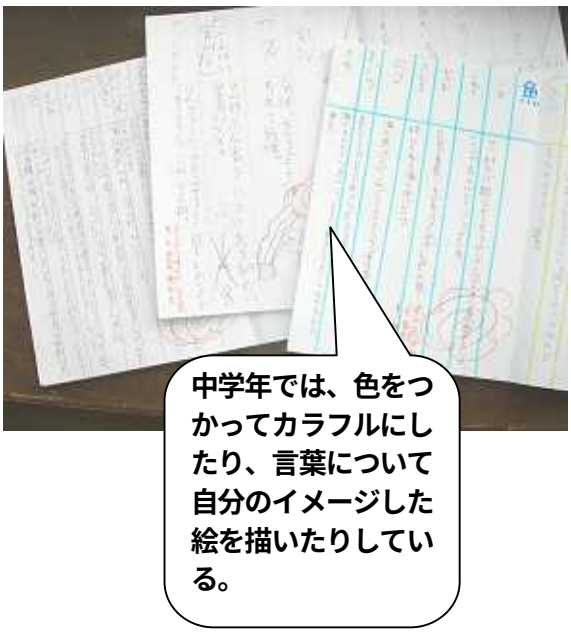
（理科室）

（音楽室）

(3)　辞書ノートの利用

言葉を調べ、付箋を貼る以外に、「辞書ノート」を作り、調べた言葉についてその意味や、調べた言葉を使った文、その言葉の反対語などを調べ記録していった。





国語辞典を使うことにより、どの学年も言葉を調べることに抵抗感が無くなってきている。授業中、分からない言葉が出てくると、国語辞典を開く児童が増えてきているように感じる。また、教師が国語辞典を調べるように促すと、競争をするように一生懸命に調べる姿が目立つようになってきた。

低学年では、簡単な使い方を教えただけで、言葉を調べることができたり、言葉が見つからない友だちと一緒に探したりする姿が見られた。また、１年生は朝読書の時間に国語辞典を読むということも自主的に行っている。中学年では、調べた言葉をどんどん発表しようとしている。友だちの言った意味と少しでも異なると、自分の国語辞典に載っている意味を伝えようとしている。他には毎日１回は調べて、国語辞典を使う頻度を高めている。高学年では、自主的に国語辞典をひくことができるようになっている。授業中、教師の話や友だちの意見の中に分からない言葉が出てくると、さっと国語辞典をひいている。また、自分の国語辞典で十分でない場合は、広辞苑や百科事典などを家から持ってきて知識を深めようとしている。

付箋の利用は、自分の調べた言葉を付箋に書き国語辞典に貼っている。本来の国語辞典の厚さよりも付箋を貼ることにより、その 1.5 倍ほどの厚さになっている。また、付箋を貼ることで目に見えて調べた言葉の量が分かるので、友だち同士競争し合ったり、お互いに言葉を出し合い意味を調べたりするという姿も見られるようになった。このように、辞書活用では、国語辞典を使うという抵抗感はなくなってきている。児童の興味・関心・意欲の面では効果があったと考えられる。

課題としては、短い授業の中で国語辞典をひいたり、付箋を貼ったりする時間の確保が難しくなってきていることやそれらのことだけにとらわれると、友だちの意見が十分に聞けなかったり、書く作業でしっかりと書けなかったりしていることがあげられる。また、言葉の意味を調べる前に、前後の文脈などから意味を推論することも大切である。その言葉の意味を推論する力も必要であると考えられる。